

●3000年前から純血保つ

本県の最南端にある串間市・都井岬は、日南海岸国立公園の最南端にも位置し、国の天然記念物に指定されている「御崎馬（岬馬）」の生息地として知られる。東西二キロ、南北四キロ、標高三〇〇メートル。面積は約八百ヘクタール。小松ヶ丘（二八七メートル）、扇山（二九五・三メートル）、都井岬灯台高地（二四七メートル）の三つの丘を結ぶ丘陵が野生馬のテリトリーで、一年を通してゆつたりと草をはむ光景が見られる。

御崎馬は元禄十（一六九七）年、高鍋藩主秋月種政によって官牧（御崎牧）が開設されて以来の歴史を持つ。当初の目的は藩の軍馬の育成。郡代が置かれ、管理一般の実務は牧奉行、その下に牧別方（牧回り）が設置され、運営していた。明治時代になると、新たに発足した「都井御崎牧組合」に払い下げられ、今日に至っている。終戦後、京都大学の今西錦司教授らの学術調査で、貴重な日本在来馬であることが証明され、

全国的にその存在が知られることになった。一九五三（昭和二十八）年、岬一帯がリーダー基地候補に挙がった際、今西教授の協力もあって、御崎馬は岬一帯に自生するソテツ約三千本とともに、国の天然記念物の指定を受けた。

藩時代から三百年。御崎馬の歩みは生物学的にも注目されてきた。現在の生息数は百十五頭。ここ数年百二十頭前後で推移している。毎年三月下旬から六月にかけてが繁殖のシーズンで、例年二十頭前後の春駒が誕生している。

御崎馬の特徴はサラブレッドなどに比べて体高が低く、体つきも一回り小さい。毛並みがよく、色は茶色。強健で一日約十六時間も草を食べて過ごすという。串間市などでは保存策として草地の改良、宮崎大学と協力して和種純血を保つため、DNA鑑定などを実施している。

詳しい御崎馬の生態、歴史などは都井岬にあ

る「都井岬ビジターセンター」で分かる。大型のマルチビジョンで丁寧に説明してくれる。

御崎馬のほか、都井岬下の志布志湾では毎年六月から九月にかけて、産卵のためトビウオが黒潮に乗って訪れ、トビウオ漁が盛んになる。最近では都井小学校の「緑の少年団」が都井岬一帯に七千本のアジサイを植樹、約五キロに及ぶアジサイ道路も完成した。さらに都井岬と北海道の襟裳岬を結んで、日本の南と北の新しい交流も本格化しており、観光面での活性化が期待されている。

三又 喬



春駒誕生。貴重な日本の在来馬として和種純血を守る

○御崎馬

国の天然記念物には昭和28年に「岬馬およびその繁殖地」として指定されている。